



追悼文「鈴木隆先生を偲んで」

2月10日午後5時19分、本学名誉教授の鈴木隆先生が逝去されました。享年80歳。先生は1981年から12年の長い期間、岩手医科大学歯学会会長を務められ、学会の発展に大きな足跡を残されました。去る2月20日午後、盛岡グランドホテルにて元歯学部長で名誉教授の柳澤融先生を葬儀委員長として荘厳に合同葬（口腔生理学講座、三田・第一生理同門会、胆江病院、鈴木家）が執り行われ、500名という多くの参列者が別れを惜しましました。

先生は永年の歯学教育および生理学研究の業績により昨年11月瑞宝中綬章を叙勲されました。旧口腔生理同門会有志からのお祝いを持って病室を訪れた時、パーキンソン病の進行により眼球の随意運動さえもが困難な状態でしたが、先生は蒲団から手を出して握手を求めてきました。私が手を握ると力強く握りかえし、その手をいつまでも離そうとはしませんでした。かすかに声を発した唇が何を言いたかったのかは解りませんでした。私は奥様の前ということをおぼろげに覚えて不覚の涙を流してしまいました。それから2ヶ月後、ご家族の皆様に見取られながら静かに永眠されました。

私は、21年間、先生の下で生命現象に対する生理学的観察視点を学び、また、先生の温かい人間性にも触れさせて頂きました。私が助手として採用された1970年代当時、先生はそれまでの大脳皮質視覚野でのユニット放電記録の経験を生かし、体性感覚野から歯髄の電気刺激に応じる細胞の記録に情熱を傾けていました。ネコを用いての実験は深夜あるいは明け方まで続くことがまれではありませんでしたが、先生は私ども3人の助手を夕顔瀬、上堂、上田のアパートまで送るのが常でした。言い知れぬ充実感に満たされながら皆で見た朝焼けの空の色を今でもはっきり思い出すことができます。歯学部長の重責に就かれてからは実験に立ち合われることは有りませんでした。忙しい時でも我々が書いた論文には必ず眼を通し感想を頂きました。また、学会で地方の都市を訪れた時には、教室員全員の労をねぎらうため一席設けて頂いたことがたびたびありました。日頃の忙しさを語らう機会が少ないのを気にかけたことだったと思われれます。皆にお酌する時の先生の優しい笑みと盛岡弁は我々の仕事での疲労や軋轢を解消する力を持っていました。「マヅモド君」と独特の抑揚で呼ぶ声が聞こえてくるようです。

鈴木先生は、視覚や痛覚の分野において学術的にも優れた業績を残しましたが、最も特筆すべきは、おそらく歯学部大学院設置を実現したことにあると思います。教員組織を充実させるためのスタッフの確保、なかでも教授の選考には頭を悩ませていたようでした。候補者の書いた論文を一編一編読み、夜更けまで研究業績をチェックし、その疲れた体で東京や地方に自ら割愛願う姿を遠くから見ていて頭が下がる思いをしたものでした。鈴木先生の渾身の努力によって築かれた歯学部の礎の上に、私ども教育職員一人一人の力を結集して時代に流されることのない堅固な城を築くことが何よりの供養になると思われれます。

最も好まれた花、水仙の咲く時期に旅立たれた鈴木先生、花の香りに包まれて安らかに眠り下さい。

歯学部口腔生理学講座
松本 範雄